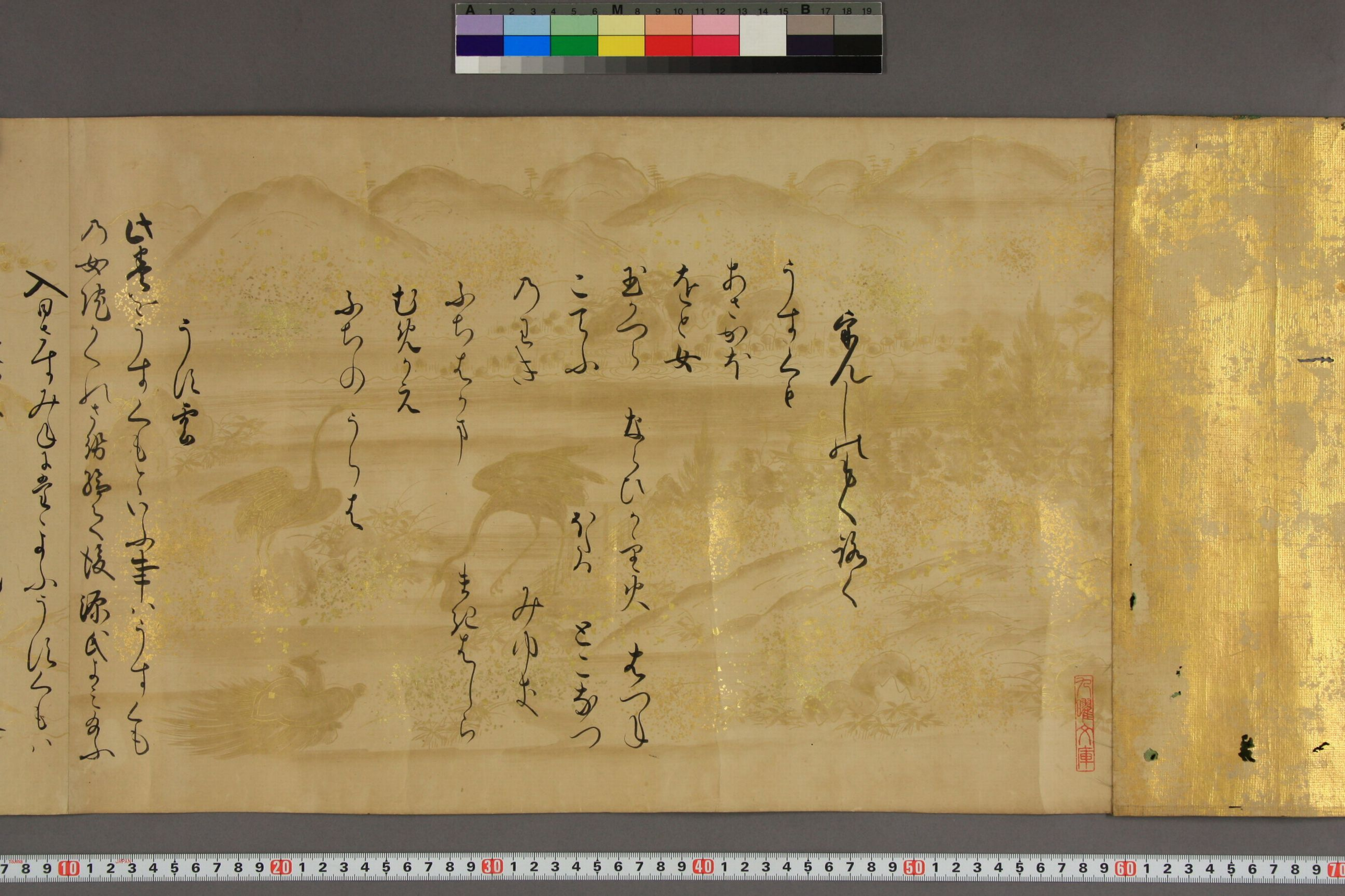


内閣文庫

うすくも
あさかや
をとめ
むらさき　なつひき　ちつま
こてふ　ちつま　とこあつ
ひとき　みゆき
ふちもち　まそもち
むらえ
ふちのうらも

うん雲

はくもうすくもいかなる
ものなれば源氏ものがたり
入日さすみねよりうすくもい

入日さすみ山よそにふりゆくも、
もみちちりすての色あさまへる
比叡の山ちかく照く日かげやさし
かちつかは文字のこころあるやうなり
の与のみくらゐにつけければ清
幸す羅生の御ゆめあとをはらはせ
ことはり清いとおもしろく帝御年十一にて
身をはかくしれまゐらせ給ひぬるよつせたまふ
帝母は照く日かげも中宮より女院
のきさしをもかう給ひくめるかし
清年廿七にてなまめかしく比は三月の
天下をとりてあかへ清門をはゝめて
なけきをしらし源氏の御
んのうち思ひやる大かたの世の
ありさまをこゝろにくしめでたけ
御時の流人を捨てて忘れぬ昔の
流人はかなしいかばかりよかりけむと
心地して人めにも大かたの御ありさまのあはれ
うちつゝきくらし世の中くらくあはれに
思ひ乱れし又夕暮のそらのけしきいと
夕付日のかげはなやかにさしくみ山の雲うす
すき色あかくれゆけの袖の色まさりけるは
まさりゆくうす雲の上といふ女院を

すゝを忘れわたる神のをしへまもりけ
ふらゆへうすゝ雲井をとゝいはしは
もうしをもみ如法とゝつ者をうちさ
うしをもあ〻久をの神のをうやくい
かく御　おとゝ事はく〳〵又は者て
天下にさかしも忘けく月日ゝ北雲
の音すまわちてもゆきの下をきて
祖よおはやけをも思めなけをのひて
ゝいのちを有にはゝ如法乃はをうく
おもしは拾つおは風けのゝ伝
わく為行のゝ人きゝ如まに波源氏
乃ゝはにくおもはまゝ一切の下おや見
をわ拾ゝ為ゝ忘れおやゝ忘れゝ
ゝ法ゝくゝさゝ少へをやゝ天下ゝ
風おゝ風をゝ世をゝ為ゝ門
大きゝ拾ゝ乃ゝ行ひく甚家源氏
おゝゝはをゝて者ゝ井ゝ拾ゝ
仰ゝけをゝいゝ法ゝ下待ゝ
たゝのゝ人潟のひく波ゝ世ゝ
まわゝ為ゝ乃ゝ拾ゝや源氏廿九
乃ゝ年為のゝ者に内ゝ
わゝせたまふおゝ
六条の院と

かせたまふおりとて　六条の院と

あさがほ　山吉あさがほといふ

源氏の君よりはなさかりとさいわんとて式
部丞親王の式部の卿めされ給ひのいつまゝく
おんせうしをもちゐるさ那ひくせんさい
わんわかのはうこん

天おうの家わたりきぬあさがほ
をのはしりはきやとゝめん

と読　ゆへ撫の君とやさいわんとゝい
かもはいつまふてはいきと神の井ゝ内まて
とゝはいかゝりのへを折りの結
き市ゝ　わくゝかゝやかゝせ給へ
つねよりはくてやゝ時ふるまちわすれてそ
はかなき懐もくさはなに一ふしみまひ
撫ゝとそのあとゝ付へしつくあやあや
久ゝと世界おちもゝ時ひとゝもことに
ちゝ詠つくゝてはふ流をしお詠ゝ
やゝしさだめとゝ

たゝ袖つゝくてはかゝれをおゝ
やゝしきだめしとや

たまとめ　代表し女こそ天下大内
あてはたゝめをもはらふ比を中一月ともも
よりうもの女房をもをゝへて天人の姿を
おゝく拾く奉ひめとして大内へ参りをのふ
天下一の人のうちまつ参せてなり
ゝつゝめはらふ事はめをこのまつを
うつもしひの成出してせまいせゝまふを
とのひくのをきアのひく首源氏にて
をおきをはりの事はめをのひゝ
めていまうをうて思のす人ををは
今いとうちめ人ゝのゝすみまふ
をゝめゝ神ゝ乙ぬん天皇の御
わふき世はもよひ色ぬを
やうゝ有ゝしめゝいゝ梅をうもすめ
を喜ゝ大内よりて内侍のをけゝ
ゝ事也是ゝ源氏の君をのひの人
内はゝ光ゝ君のゝ光ゝの大将
とゝきゝしたまひ紀ゝ心ゝ紀ゝ対く

のぶもちよりの君のうちに、光きよもの大将
ときこゆ　たまひしかの山ぶきを尋ぬ
人々おもしろがりあへるに、人々
甚三郎とかんのくらべ
神仏をつけ　又山吹に光きよ十二
かくさんかく本をいはるるかの平氏おもち
の内大臣はすまひなりとなりの
おもしろの大とうの内もとにおひいたちをの
ふとけるとにあひてこひ
行ふ姫君もとりこひたちて
やつけてあやうく引きのきく姫君を
我所へとりかへしの内大とうのうへのあは
やうに井ねらいとりかへ　毋うの
おもひ出ぶ姫君をいとこなり　仕まつる
きこゆやそたく姫君ふ姫君んくくあち
一夜のねさめに雲井はちと我下やなり
の我波夕雲ちやていと思のまを
まち作ねよ　おもうとうれまれよ
知ぬとちいまひくめとうれて
こと聚　雲井のちり　ひとを
をきこえ紅ゆ　松ぬめ
いとあ　一品ふ物語　つまふ

なきさの院をおもひけるとそ申つたへし又この人
いろ好みの道ある一品には物語しるしまゐらせ給
波雲井のかはりはしめ人の心ざしにまかせて
帝の夕霧をいまうへは其後六位上にして名殊よ
此姫君は春宮へまいらせ給ひて後は
髪はすこしいなかうやまひしなと立后せさせて
ちゝらうへし又是は手習にあらはしてはへし
いろおとなしくいとたえかんを封はし
夕霧の小野の事は雲井のかくと思ひしへし
ゆるをあまたかんにかへしては秋の事わ
又此巻は源氏の栄京極にてはまかふ町
まちなしのてこのはしらをとゝかかく侍
女房なるかやうの事に心をつけしのみ
庭を植ゑし又花菊もまたはむらさき紀
の院の春のおまへのをこゝろのよる五木
をさうへの袖よう春風吹ては物語乃
おもておもやしき花ちる里とはきこゆへし
春の御方にかく卯の花しげからんにあらず
ほしなからへらしくもれる里にもくれへ
帝おもしるし椒もめつかれ女性とかは源
氏の君やうやもはしめ物を両ままちよりこそみ
たまふ母の宮治にわかれふかく流されのふかさ
此女房の君は姉の夕へとも思ひおもへは秋乃世話

たまゝ是に宇治にわかれのふたをあけて
此如原の君に姫の久しとゝめめへに秋乃暮ぬ
はつかふうたをきゝて木たちき五葉色を
もしへとゝにおく袖のおりしはひ
ゆくとなく枯まさるまに小ぜまもるまに
乃ぢにかたらふおもひ出ゝ竹ふる
ゆきの色をしさ成つゝふゆの色乃野邊
乃てい石巖の松乃雪ゝ紅葉を面とにたる
きもあけぬへしゝ出とこくおもひ
あらぜまゝ仙ゆく先へ一ぢ
かゝくたの庭ちめくゝくゝ姫の
梅つゝ枯方真くゝおもひたまい
くゝに枯くゝ成如原のくゝもも
をもゝぜくに入くゝへわかのいとて
枯者くきくゝふなる紙
南つゝひまて
もゝかきゝ

うゝ乃ち風の
枯くゝ成ゝ
ゝ枯くゝ去まつゝゝ紅葉を秋宿の
紅葉を風の枯くゝへてもみよ
枯よくゝをくゝ
世乃たよりゝ
五葉

ひよしたぐへからん　世乃たよりに
みな紫なと
おもふ覧

又はさみのかしは紫のゆかりへ乃かゝり
波め院乃あきのゆふへなりけるもみちは
流れしは色も花をいまねの雲より
ましてこその理わりなれ又哥に
木枯の法のあてにはさくらや下葉は
秋まつむしそらかく君かなん
さよみえてわ路はいとおもしろき庭
あわれやの乃いみれをとめの袖のあはれ
月しあよりきよらかなるしまかれた雲
井のかたしめなとおはつけりしくは
たもれもみちの
定家とおもひて
なきの
さく顔みくさ　あらんと
まつくは　きらんと
玉つて　此巻玉つてといふ事
紫はとのまにに偽つてみ姫君のほくし
よわ乃おすしはらかんといひし　めよう

紫式上の夢には猶かつみ姫君の侍くし
よろつのわすれかたさもへんといのりめなと
ものをおくりあはせ源氏よりやしろ六
むかしひらてうしけるを竹ふせあふみなりおらん
いろあるあたらしきうたをひらく
こひしきまいらす秋なりし玉かゝり
いかなるすちにかはきゝつぬらん
とおもしゆへなれは相玉つらきことを事は
久しくはのかへるものおもひおもひの下
年ふおもわぬ秋の草の情もなくの人を
見まかふとほへまてきゝし濱のますか
乃る心よかすし猶しもふかくにつきのふ
うまれいくらかさらくてえれくてこそあれ
弟か伊勢物語によりなしてこ淡路つさ国
むと思のあるよ伊勢姫君は業平ひとてめれ
こゝにつまつくはくしへらわやすくおとなひ
さまふまにいろもとかうけすはひら
姫ありとくまれぬとあはせよいらしくおもひ
うつきなるひとくめのとみ男子今め
とほまぬへしかはなくれくてめくり
ちよくこと東海頼まうひの國にありて
といひまうてゝてまてよりもとらむかえひこ人せんと
すえにおもちゝすと頼みて二三人して
こゝくかまへく京へ乃都東海道業平来

すゑをおもひうすみかの
こうくわまへ〳〵と高
是を聞て乃
乃あをや立たつ人おもひてもや船あく
の海せを海之先をたて乃ひかれ
くいるわ　もちもち　もやあもと
ほりて乃ほりに付て
ふくてうもんをいくゆきあひ源氏よ
やむひを紀行く紀げ孫乃大将の小
乃ふを左ふもの　内侍のつかけまふ
玉ふ内侍の
行ふ乃京へ乃ひていもせおとにもや
えやしくふんとを孫ふくるあわ
高すをもの孫ふ有やにるこさう
佛のとふ〳〵世まんともつとに寄せの〳〵ふ
うんと高ふ
ほふ乃ひにもふ文さう孫ふ
君のをされ名を弟ひめといふ世よき恵
くもわと高乃ふ　ふうふ世ふ
松月乃ふを忘よくふんしけうこふ音
丈へ正月やふ地くふふ孫ふ世の
上のふ人をあふ文のきぬけすひめあ
乃ふ人のもふけ孫乃方へふ孫ふこそて
花ちの里乃丈へいもるふ色のきぬ世ふ

八うへのもとに水をそそぎて
花ちり里人丹へいまるるこのきぬ
つむ毛に文へ柳うつせみあまに
くもちすの
一ふしきぬ　くもちといふ

しきにあまたしてはくらいもの
あるとにはたかはかきぬの事紙
いまんとうつくしき井の色みるを云
又しまるなるきぬの以ていやし
あるいはあらぬ刻とかなる
いうかはぬ以ての事みる
ふるはをあらとこそ云人やいふ
も井をいふゆるい紙を物ぬきて
はぬるわ里ふるとこそ
物ることはあるとはいふ世
せゆるすと云也物ぬきに以ていき
ふるとくに物るれもゆるすといふなり
おちくちをと云下は是も引ぬるぬ
物音　しきをつねをいふ
あるに上の事に水を以上の
なりておりませいんなり下もなくて
ひ
ふく品正月一日皮は文あり

なりておいませいたんなりともなくて
ひ
とく品正月一日はは宮へ
年月をまつよひもてゆかしく
そふうのはもちつのきもよ

こよみくもはあたらの葉の玄枝よりこの
をつけて奉るに立えられ松にはこひたりこ
みよりへるもりあるといふかきへしはよ
もしらあのいと井のもちいといふまいこ
乃下文巻の上に源氏ものひもち
うひかりのうつくしきのみなと
代々をなりにてなりにけり
ご後一也代ひなるこ元
初春のいと井もよ
行平

なるひ　こことふ　光そしいんきゝ
乃きはなといらたとてはいかはよあて
ときやとていのきなるとは仁王経大般
若も云へしよこやはうあはは六条の
やはは所のはそはめさいくは女御をは
きゝはは立く中宮とは宮久の
はやうあるはいは条の御屋へ出せのて
をこなる其つねてよ紫式上仏は乾
せはふとてとはるにはこそはそを
出るあはは山のよはもはく中宮の御
方へ事せ行は奇はこの事せのふ

此うめの花にて山ゝとちく中宮の御
方へ奉せ給ふ 寄山霞 山のゝいとなせるふ
ゝをとめの来るよりいとくらうつる春の
山井 文を秋をとめ給ふとて 秋うつ
ろはぬ木ゝにあひくる色おもふ袖にし
ゝ書とゝまゝ給ふ 船 ゆく末に世はいと悲し
よの中をうしとおもふ人すらも袖をぬらす
ぬるゝ行ひ 梅 山吉をよいけ二の山をと
はたちてゝ人のこゝろ船あらしの
内あるとゝまつけゝ
 新書の事

うゝ世をうきふかゝをうきし女の云を
神はたゝむるといふ所にふかき物語
き事ゝうやはうはうはうはうせいと
内れを記したやうつそう 山吉歌御
懐文もひと記さとくまつ
かうとうの内
あゝいなやめのさゝやみ
 事記ひあと
 清ひへ

なゝ 初ゝ 山吉堂と云ふ寄
こゝいとて方をとゝ内ゝ
いふゝをゝ内ゝひなゝ

こゝにて月をながめたまふこゝろ
いふかたもなきほどなれば
八幡の八ん社をはじめたてまつれ
たき御子の御ゝ大上天王の御子の源
氏の氏をうけ給はれたまふこゝろ
なくんばかりなく五月の日代々のひて
おほしめすこゝろ源氏をきくく波羅か
ゝるもの出てこれをうけ給はるなかいとく
心はつきさんゝやうに目よりも涙をおくくゝわ
あつのくまやうにひつみくりをを
さふらんとてはのうにはかゝる物なり

なるに　ここにつ　はるとこつ
はるこゝろ中をうつして天をむかへたてまつりて西の
をいはすしをはるの首西代のこれ
はるつめの時物語よりはるは姫天をすてこ
と哥にはるはめしはるすす
きはるはるは宇はるは廻ふ祖つの本草い
うへはるてかゝやはるこの名氏
はるくうへはるは紀ゝ孫ゝ忘はるは
おもふ孫なるめて源氏の天をもめ
たまて久きの大和のはる中將と
いふ基平はるゝ天ゝはるはるます
みくにのおいはなとはまへあて

いとゝ其みわたさるゝせうらます
みくらのゆかりなとはまへみそてうて
みしておもひしやなてこそみ
ことおもひ何おもひなてこ
のませたまひきなと甘へし思い
むすふもく御ま
とこなつのこゝろ
あなかしこ

なつも　かゝり火
此まきはかゝり火といふ事を
もてひたちそふこひの煙こそ
よにはあまき思日なりけれ
此人は玉かつらの君を源氏心かけて
いろふかせ給ひしと源氏の御心は久しきに
みちのへつら縁のかくきこしめし
なと流を行ふに月すゝしく流まへの
風のけしきまてなけきも心のうち此事
なりやそて御心のまゝにおもひく
よわりて縁くよひまて御てまでおもひ
ますかゝり火をほそうて思ひまつ
ひのけふり　煙の物思
なといふ事はまへし
玉かつらのこと
なおもて

なといふ事はて者へ

武うつのこと　なれ

おもひ　うえ風

武うたれ　みとの

やしよ　ほく　頭

あるに　野分　はたの　はたの

いふ下こゝろ八月よ大風ふき

雨さいを原　ふつの地とい　れうに

ぬきらして　さしはの　ちわ

梅はなゝきの大将　ゆき　井ぬ

やうし　はたの　こへ風のとゝひふ

はゝ　野分とふ事あは

大風と心ゆく　むやとられ　ろ

ものいふへ　梅風　あた　夕暮　大や

波雲井のうの　にへ　をつ　す紙のいと

紫　すやわ　あくあるやつ　て　す

風さはきもし　くも　ますよ　夕あも

わは　風　ふく　ふれ　ぬ君

はせひろ　れ　くゝ　ゝ　すろかやむ

らくも紫のう　すや　むさ　あと

下ふく　風　こ　濡　あく　雲井の

かわと　風　ゝ　影

乃ほく河し濃やこふく雲井の
かゝとくる数まし

あらし　みゆき　此をこゆき
此は下は十二月よ帝しやう大原
野たかゝりのきやうかうありてよ
みゆきまつとや　をしほ山　たつ
雪　きし　ふるきあけ
いふこと　あさ御

なにはえ　ふゆたちぬ
此まへふゆちちぬといふ王仁
難波乃宮やにてさくやこの
はな梅をうけよかのうらと
此心は甚此世にやみ開白は梅は深氏
乃花こゝろとしたるこのよみ流あふさし
玉ゐは此もれめ是此をしをしみ流もてそ
大上天王のいきう源氏此流しなよは流しと
さめ葵乃とよは帝母也なきはせうつされ

大上天王のいまゝ源氏物語あるいは紫式部日記はいとはるかに
とゝめ給ひしの御書物也はいとはるかに
久きしの大ねりをうゑおかれまし
年つもりてくれるしの世つゝ久書
の大將とふくをきゝ給ひて波海
うたちに成うたちなるいつくにか
ゆへさおかれて内はさうあり内はれう
ちの極くおかれてくあらまし
きとゝふ下常に作をくさ秋の月
中ねむ月をかゝぬかあるさ
ふ使ゆくうちもまわりてふくく
みたれもとへうたのちの出くあの

乃ゆしおもしゝ行きてみたれうちに
入くさうゑ成ようてはるのき
うこの
さわも
ふちもあ
あゝ
いとこ
同歌人
みたの
はるの
ふと
歌
同

あゝ

まきはら

二條きさきもらいみ年ハ五年

あらい

こゝろまちにもらいつゝ手紙

いまゝてやゝ

はなさんばし　　為氏卿

はなのせんにおもうて乃者よりけふの大将

かゝる行ひのふかもとの小れてるとおもて

はおや家せとのち　　家綱の家老に小れ

かゝむしさにのうへ　　ふとれまねうか市

うもちまと　　すおもて　　れ物のけよ

五月ちこめを　　何事よつ者てもちへ

なりにおりち　　てれ中とはこれて

おりけりよむう　　の君と　　ひうもく

うちひのふ　　かきくしつよ　　ますよ

おうくわちの　　きいの物のけや

ちちもん　　ゆちれをいを

うちけ　　大やゝ

以ゝ思ひうて　　みくうて　　ゝ

はちて　　の　　ゆ　　付　　十二三ヶ

ゝやちの　　ふ　　者のもう　　ゝつまて

り行ふて　　又君　　ひよりぬ

ちはにもち　　れ　　ひまて　　井

り行かんとて又君はつゆよりもあぬのひ
と所にもとれひいまてゝ中へ引きて
色のうちにはこの物はきてかうしの
さうにてをしいくなくりはりひ
ひきもらといふあるまい
はもいあまりかはは
なとこのつまへしは
大将を春文はちはあちこ
みかはりはきへ人をとおりきたを
ゆくしの者なくおりこれを物見の
おもてはこけりとうちて
ちとは小の音ゆり行て板をつの
内侍のつぼむへ入て口をあきら
出さをせりしはこ此をつ源氏はた
先をわて人しをかもはかはよ
るいすの記けるあとはもちの
まふしきこゝろおは絵又ゝき
八宮はんのうをはしをしをせりや
殿の大らなれを内侍の奇とはふを
かもめいくをもこてきをんはて
旦君をこれをこ子
いもらつの以ゝをれを
はよみをなわしを板をかをい
いもを源中将とはいを源あんを

はなみてなれし梅さくらかなたをい
いまも流中將いとあはれあんを
はるかもせまもりくらはなせむとて
ひかりひ形うつ

梅うえ

正月廿日比源氏のおとゝ六条院へ
たまものあるをあはれ是いあしたもとの
はなすゝめ春宮よりおりはせんさいあん
とゝ波あさうはれはるとゝ波さい院源氏
みんはなすてやうにんちわ比丘尼まわ
ちをもはるかに梅の枝をあんるうの
つゐにさきもみ入くゐ家の松の枝て
はなをてとゝろよつゐもたはもも入て
むめ代ちてはなをれをもつはろ
ゐのさ海ゐよりかゝ立色のをなる
とゝはなを動をなをいやるゝはゐ
おもゝ詠さ一ゐ梅ひとゝるを秋ゝ
ゝ一ゐ

春宮ちゐえるゝまゐ
うゝん神ゝはゝあめや
紀あをゝたゝ物ゝゐ乃ゝ
ゝゝえゝつゐ神
よゝとはく四

[illegible]

[illegible]

ほろのやふ

きやの

[illegible]

たき

[illegible]

[illegible]

たき物のいろ〳〵梅花と第八

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中ふり梅花、甚比のおちよあのく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花乃兄氏なる神ようても

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

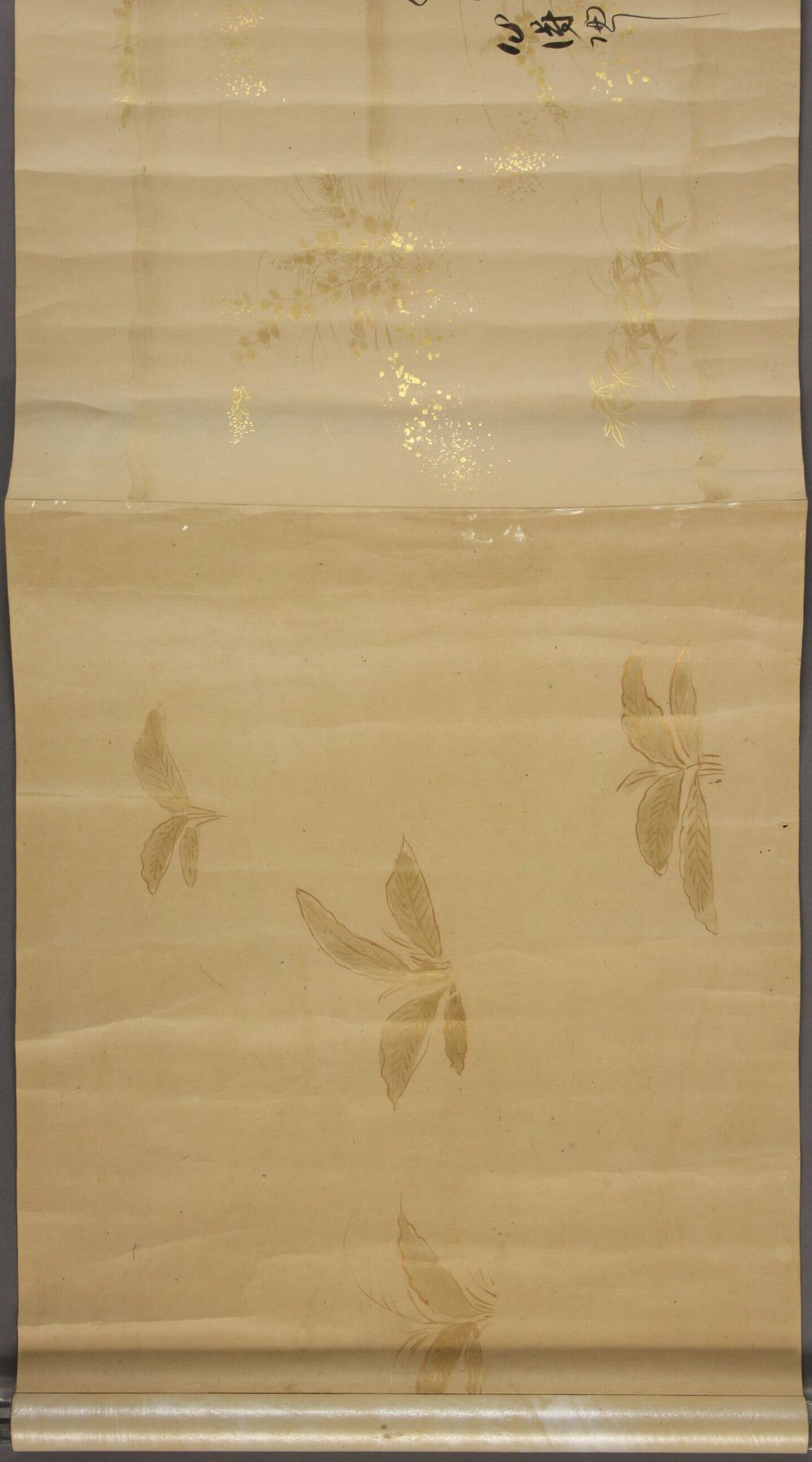
ニ有清涼殿の東北ノ車寄ニ在て
めづらしき古人をもとめみん
もみぢも見わきなはて人を君
とはゞ梅の枝にまた物なし此哥のこゝろ
をとめあふせくつけゆしみたきもみて
香ハ何ごといふべきあり妻戸にかは
宿りつむ来るさもおもひまつりかく
ひくうちまとかはへしわれの下まわ
おなじようつむ此流川水なくなりてまと
と付つゝしものは皮きにて尽くなり
ふくまでも梅はさきはつる時くへし
梅花なきいはす香ひえといふなり

荻のうへ　ほか荻ちのうへ葉と云
下は雲井のかれは姫君久きかれを雅の前
よわき葉をめて年經ぬるよひの君は又おもく
のゆかしきはさあしか梅をさへきよあらねはゆ
ふし竹のうへ乃かはてあとしれは家ふちの
はるをなるに夕暮ほとり中将かてまつし
をとめひさ風さく竹にも流おもかも
香てさそつまの清ぬてよふちのうき葉
とみのしあなかなり本哥て

朝日さし荻のうらはのうちなびけて
きそしおとして秋もたのみあん
とほふ哥の心ま思ひてむこにとらえん乃心

きそ[illegible]おもたかもん
と[illegible]の心をもつ思てむこにとりもん心
をもはらいなくむこをかてらつも
たくめそうし侍よこ条上とやい
はゝ[illegible]井のうわ[illegible]下[illegible]はまつの市をも
おさのかしらそ[illegible]月
うり

相かゝる一月よあしはたちの姫君
書そめよりわ行ふ市つ月をしは
きちつわ也はた年十二むしはつぬの
市はは月ねるとい源氏の[illegible]さうはくう
ふはいやとさきはほくいとくおん
さうあらんあまの[illegible]の[illegible]乃市母
あく一文そ春[illegible]
乃中をゝ此はまくてそ年九の
おそはた年廿九あく大上天皇は源
氏をかゝわ六条院とやきゝ井
をきゝめ給ふ乃[illegible]紀事あは
あるゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]乃ち
あとゝ一はりてめつらかゝめそし
乃そ其秋六条院よ市春るの
はたゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]大[illegible]おもを
城中紗[illegible]にあさ[illegible]いつくまてもは

はるばるまわいそぢ寿あれ　おとど
坂中納言にあさぼらけいつくまでもまた
こひ路ふみまよひぬる　みゆきのおも
ぶせ　ふるさと　中あふ

高しめくゆんあくおもまれ　申
あ〻人こゝろ　ひとつ　六条院の
はるさいせいゆんあくおりもすれば
南さき軍　院あくおもはれ
南　大政大臣の　はさにさ　ぬる
を　はるゝ　こゝろ　いく　ひ　高しめ
南　夜を　なの　はるぬ　あり
かゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ